

主と共に～信仰の記録

内海由美子

洗礼の恵み

1989年、私は日本聖公会川口基督教会で洗礼を受けました。ちょうどウィーンに留学する直前でした。海外は2度目でしたが、初めての一人暮らし、ちゃんと暮らしていけるのだろうか……。きちんと勉強して成果をあげることができるのだろうか……。不安と希望の入り混じった気持ちで日本を離れたことを今でもはっきり覚えています。「どんな時も神さまは共にいてくださる」という言葉に励まされ、力づけられました。未熟な信仰ながら、神さまは私に一番ふさわしい道を備えてくださる・・と感じていたように思います。

私の生まれ育った家庭は、キリスト教とは全く関係がありませんでした。学校でキリスト教教育を受ける機会もありませんでしたから、まさか自分がクリスチャンになるなんて思ってもみませんでした。

大学院1年生の夏、ウィーンに初めて行きました。40日間の音楽講習会に参加したのです。ウィーンは「音楽の都」で、街のいたるところに音楽があふれていました。生活の中に音楽が根付いているという印象を受けました。そこでたくさんのキリスト教文化にふれる機会が与えられました。特に教会は想像をはるかに越えたスケールでしたし、音楽はもちろんのこと、絵画、建築、すべての根底にキリスト教の影響があると実感しました。

声楽をやっていることもありましたが、キリスト教文化に私はなぜかとても惹かれたのです。その頃はまだ聖書の知識もなく、わからないことばかりでしたが……。特に聖書を題材にした絵画に惹かれ、ドイツ語の辞書を片手に美術館で何時間も過ごしたこともありました。

ウィーンに行ったことで、私は留学したいと思うようになりました。ドイツ語の勉強をはじめ、留学準備を始めました。それと同時にキリスト教を深く知りたいと思うようになったのです。

大学で出会った友人がクリスチャンだったこともあり、その友人が在籍する教会に私は自然な形で導かれました。(この友人が生涯の友となりました。現在、この友人とともに「川口チャペルコンサート」を行っています。) 両親は、留学に際して「心の支えになるなら」と私が洗礼を受けることに賛成してくれました。そして洗礼の恵みに与った私は2年間のウィーン留学へと出発しました。

留学時代

ウィーンでの生活はもちろんすべてが順調だったわけではありません。音楽面でうまくいかず、つらい思いをしたこともありましたが、しかし、「神さまは私に一番ふさわしい道を備えてくださる」と思えたことでずいぶん力づけられました。何より病気や怪我もなく、

好きな音楽にどっぷりつかることができた経験は、今にして思えば私の財産になっていると思っています。

オーストリアはカトリックの国です。街の中心には壮大なゴシック建築の「聖シュテファン寺院」がそびえたっています。ウィーンの教会は、いつでも自由に入ることができるので、祈りたい時は静かな時間を過ごしました。数回礼拝にも出席しましたが、日常会話は何とかできるようになったとはいえ、ドイツ語の礼拝は難しくて（説教は全くわかりませんでした・・・）カトリックのミサの雰囲気を感じることもぐらいしかできませんでした。ウィーンには聖公会の教会が1つだけあり、何度か訪れたのを思い出します。（この礼拝は英語でした。）

帰国後

2年間の留学生活を終えて、1991年秋に帰国しました。私の日本での教会生活の新しいスタートでした。教会のことも礼拝のこともまだまだわかってなかった私でしたが、声楽家ということもあり聖歌隊に参加しました。ただその頃は、「歌うこと」が「神さまを賛美すること」だという認識は全くなく、合唱を歌うような感覚で歌っていたような気がします。最近ようやく「賛美する」ということの意味と喜びがわかってきたような気がします・・・1993年、クリスチャンホームを築きたいと思っていた私に神さまは道を備えてくださいました。教会で知り合った主人と結婚し、そして2人の娘を与えられました。

クリスチャンホームを築きたいと願っていた私ですが、娘たちが生まれてからの2～3年は、日々の忙しさを言い訳にしてあまり教会には行きませんでした。信仰に迷いはありませんでしたが、「礼拝に行く」ことの大切さは全く分かっていませんでしたし、時々家族で教会へ行っても「喜びに満ち溢れる」という感覚はありませんでした。

ちょうど演奏活動や仕事も忙しく、私の目は神さまに向いていなかったのだと思います。そんな私に神さまは、また道を備えてくださいました。子どもたちを教会で育てたいと漠然と思っていた私に仲間を与えてくださったのです。その仲間からは本当に多くの恵みを与えられました。子どもたちからも気づかされることばかりでした。そして、教会学校のスタッフとして活動するようになりました。今は娘たちもずいぶんと大きくなりましたが、教会で子育てできたことは本当に幸せだったと感じています。

また音楽家としても大きな転機がありました。体調を崩し、思うように歌えなくなったのです。幸い本番で失敗することはありませんでしたが、体調が悪いなか本番を迎えるのは、やはりつらかったことを覚えています。何とか調子を戻そうといろいろな方法を試しましたが、なかなか道は備えられませんでした。

「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」（伝道の書 3:11）という聖句に励まされ、きっと時がくれば、神さまは私にとって最善の道を備えてくださる・・・と焦りがなくなったころ、私はT先生と出会いました。

T先生との出会いにより、私が今こうして元気に歌っていると感じています。
今では以前より声の調子も体調も良くなり、神さまは私にまた気づきを与えてくださいました。私は、ずっと自分を誇示するために歌っていたのではないだろうか・・・と。
そして、再び与えられたこの声を神さまを賛美するために用いたい、歌を通して多くの方と分かち合いたいと思うようになったのです。すべては神さまとの出会いにより、私自身が変わられたのだと思います。

これからも神さまをみつめながら、備えてくださった道を歩いていきたいと思います。祈りと共に。

(2009年10月)